

どこかで始まる前奏曲

時計屋

1 編入希望者に対する学校の態度

魔技学園についての噂はいろいろある。

そこの生徒達は超常の力を持っているとか、実は彼らは人間ですらないのだとか、下手に足を踏み入れると異界に吸い込まれてしまうとか、そういった馬鹿馬鹿しい噂である。主に魔技学園周辺で流布している。

夏休みのある一日、その魔技学園の校門の前に、星河一真は立っていた。

身長は平均的だが、伸び盛りの15才なので、これからに期待。

暑いのか、白いブラウスの襟元を大きく開けて手でぱたぱた風を送り込んでいる。

一真は少し迷ってから、校門脇の建物の中にいる、守衛らしき人物に声をかける。

「すみませーん。編入希望者なんですけど」

「ああ？」

やけに強面の守衛さんはいきなり睨みつけてきた。子供が目撃したら夜うなされそうだ。

「編入希望者ですよ」

一真が負けずに言うと、強面守衛は手元の新聞に視線を戻す。

「編入用の書類は入って右の事務室」

「いや、それらしきものはあるんですけど」

鞆の中から大きめの封筒を引っ張り出す。親がどこからか手に入れてきた物で、保護者印や署名も完璧である。

「貸してみな」

渡すと、今度は書類一式にガンをつける。

しかし、アラは見つからなかったのか、一通り目を通すと返してくれた。

「流翔呼ぶから待ってな」

言うと、内線電話らしきものをどこかにかける。

「……流翔？」

どこかで聞いたなと思い、校門の横に「魔技学園流翔校舎」というプレートがあったのを思い出す。

（いくらなんでも校舎は呼ばないよなあ）

間抜けな物思いは守衛に邪魔された。

「第三実験室だとよ。とっとと言って渡してきな」

「その、第三実験室ってどこですか？」

「一階の西の端」

「そうですか」

お礼を言って去ろうと思ったところで、さっきの言葉を思い出した。

「流翔って何ですか？ 人ですか？」

「流翔？ 流翔会長だよ。流翔魔技会会長」

とりあえず人ではあるらしい。

「どうも」

今度こそ礼を言い、一真は校舎の中に入った。

玄関っぽいところから入った一真は、適当にスリッパをつっかけたさらに侵入する。

「西ってこっちだよなあ」

歩く。

歩く。

ひたすら歩く。

延々と続く廊下。同じような教室の並び。

「？」

さすがに疑問に思った一真は、横の教室を覗いてみた。

なぜか、おどろおどろしい極彩色の空間がうねうねと広がっている。

「これってあれかなあ。無限回廊とか無限階段とかそういう類の怪談。へ～え。初めて見た」

何度も見るような生活はどうかと思うが。

「どうなってんだろ。やっぱ中入ったらまずいんだろな」

ポケットの中から小石を出して放り投げてみる。

石はもにゅっと飲み込まれて消えた。

「やっぱまずいよな」

とりあえず、あまり意味がなさそうなので教室のドアを閉めて、辺りを見渡す。

「誰かいないかなあ……」

それに答える声がひとつ。

「呼～ん～だ～か～ねえ～」

これもまた、子供の情操教育によろしくなさそうなおばあさんの声。

上の方から聞こえたので天上を見ると、逆さになったおばあさんの顔がだんだん下りてくる。

「うーん。こんな真昼間からやられてもなあ。怪談って感じじゃないよな。おばあさん、名前なんていうの？ 俺、星河一真っていうんだけど。幽霊？ それとも精霊とかそういうの？ 俺よく知らないけど。ここに住んでんの？ 通ってんの？ それとも通りすがり？」

全く怖がらない上に質問の嵐。

おばあさんは怖そうな顔をやめると、上下を正常にして床に降り立った。

「何だい、つまらない子だねえ。こういう時は義理でも怖がってみせるものだよ」

「ああ、ごめん。こんなの見たの初めてだったからさ」

少ししゅんとした一真に同情したのか、おばあさんは優しく言った。

「まあ、わしにわかることなら答えてやらんでもないよ。言ってみな」

「そうですか？ どうも。流翔会長とかいうのがいる第三実験室に行きたいんだけど」

流翔会長という言葉聞いたとたんに、おばあさんは50メートルほど後ずさった。早業だ。

「だ、第三実験室ならこの先だよ。勝手に行ってくれ」

言うと、かき消えた。

一真は首をかしげた。何か、気に障ることでも言っただろうか。

教室を覗いてみた。今度は極彩色のかけらもなく、普通の教室に見えた。

言われたとおり歩いてみた。第三実験室というプレートを正面のドアの上に発見した。

「よし、着いたな」

ためらいなくドアを開けた。

そこは、意外と普通の実験室だった。

半分くらいしか見えないが、4人1組くらいのテーブルがいくつかと、それぞれに水道。壁際にも水道。まさに理科実験室である。

入ると、ドアの陰、右の壁に大きな鏡があることに気がついた。自分の上半身が映っている。

その鏡面が、水面のように揺らいた。

「？」

一応警戒し、鞆の中に手を突っ込んでおく。

直後、鏡の中から半透明のおじいさんが飛び出し、見た目の年に似合わぬ素早さで撃ちかかってきた。

一真は、警棒に気をこめてそれを受けた。

カーン！

何故か金属同士がぶつかったような音がし、一真は衝撃に一步後ずさった。

次の攻撃を警戒したが、その代わりにぼやき声が聞こえた。

「うーむ。反射神経は悪くないんじゃないかのう。何じゃその無粋な武器は。日本男児は日本刀であろう。これじゃから近頃の若いもんは……」

確かにおじいさんが手にしているのは日本刀である。これも半透明だが。

何となく無駄な気もしたが、一真は一応反論を試みた。

「今の時代、そんなもの持って歩いたら銃刀法で捕まるんですが」

「何を言う、わしゃ捕まったことなどないぞ」

「そりゃそうでしょうけど……」

半透明のおじいさんに関わりたがる人はあまりいない。

「そのたわけた根性鍛えなおしてくれるわ！」

そう宣言すると、おじいさんはいきなり攻撃を再開した。

カン！ キン！ ガン！ ゴン！

「うわ！ あの、ちょっと、おじいさん……」

「何をう!? わしゃあ、まだまだ若いぞ！」

カン！ キン！

この調子で永遠に続くかと思われた打ち合いは唐突に終わった。

「まあ、今日はこのくらいにしておいてやるわ」

そう言い捨てて勝手に帰っていくおじいさんであった。

「何だったんだ……」

「鏡爺だよ」

声が聞こえた。

振り向くと、ドアからは見えなかった場所に同年代の男子が1人いた。学生服を上着まできっちり着込んでいる。いくら建物内は空調が効いているとはいえ、この夏のさなかに見ていて暑い。

脇にテレビのようなモニターと、大きな機会の箱。正面の机に書類の山。

「かがみじい？」

とりあえず、聞こえた単語を確かめる。

「鏡に住んでいるから鏡爺だ。シンプルじゃないかね？」

年の割に偉そうな話し方だったが、それはともかく気になることを訊く。

「それ、何だ？」

「コンピューター」

「コンピューター？」

モニターの上では、4つに別れた画面の中で、トランプらしきカードがカラフルに並んでおり、どこかの映像が映っており、作成途中らしい文書が続きを待っており、数字の群れがすさまじい勢いで流れていた。

「コンピューターってこんなんだっけ？」

「何を言う。魔技の誇る新技術だよ」

「学校が、何で新技術を誇るんだ？」

「魔技だからね」

「理由になってないような……」

「それはともかく、君が星河一真かね？ 私が流翔会長の冬朔夜だ」

そう言って手を差し出してきたので、一真はその手を握った。

(うわぁ、白手袋だ)

「応援団長か手品師みたいだ」

素直な感想を述べると、

「残念ながら応援も手品も得意ではないね」

素直に返された。口調はともかく、

「流翔って、その、流翔会長とかのことだったのか。門番さんが言ってたんだけど」

「ああ、正式には流翔魔技会会長だが、長い上に会がかぶっている。近頃は会長を略す者も多いよ」

「魔技会って、生徒会みたいなものか？」

「そう。この学校は人数が多いので、学年ごとに分会があるわけだ。現在は中一から白影、流翔、幻瑞、波輪、星羅、結鏡。校舎の名前もそこからついた」

彼はそれぞれの字を書いて見せてくれた。

「……意味は？」

「さあね。もしかしたら単にかっこいいからという理由でつけられたものかもしれないが、伝わっている名を無下に扱うこともあるまい」

そんなことでいいのか。

「さて、書類は持っているそうだね？」

やっと本題に入ったので、一真は書類を手渡した。

朔夜とかいう流翔会長は、ひっくり返したり透かしたりして検分していたが、やがてひとつ頷いた。

「問題はなさそうだね。ちなみに、どこで手に入れたんだい？」

「どこでって、親がもらってきたんだけど」

それがどうかしたのだろうか。

「ほう、それは、特異な人脈を持つ親だな」

一真は自分の親を思い浮かべてみた。

「まあそうなのかもしれないけど、なんとなく、お前には言われたくないな」

「何故？ 心外だ」

しれっと言ってくる。きっとそのうち自分は普通だなどという事実無根の主張をしてくるに違いない。

「それはともかく、問題ないので受理しよう。取り消せるのは一週間以内なのでそのつもりで」

「そりゃど一も」

礼を言ってから、不安になる。

「……これで終わり？」

「ああ」

「もしかして、新学期から通っていいのかよ？」

「そう」

「……ええと、編入試験とかそういうものは」

「鏡爺の百連攻撃が流せるくらいならいいだろう」

何か違う。

「いや、そうじゃなくて、勉強、学習、学科？」

「学科試験ならない。最終的には私の判断だ。本来は書類入手で一段階あるしね」

「入手自体が難関な書類って、そんなに人入れたくないのかよ」

「優秀な人材なら大歓迎だ」

「だから、学科はいいのかって」

「おや、君は勉強が得意なタイプには見えないが」

凶星を刺されて一真は少しふてくされた。

「いいだろ、そんなの別に」

「そう。そんなことはどうでもいいのだよ。実技ができればね」

「実技？」

何の実技だ。

「科目名だよ。一応ね。魔技生が、特異な能力を生かして不思議な事件を解決するわけだ。半分ほどは外注」

「ええと、それは必修？」

「もちろん。私立なのにこんなに学費が安いのは何のためだと思っているんだ？」

外注、学費、お金。

「それはつまり、外部から依頼を受けて解決してお金もらってるってことか？ って、それ、生徒働かせてるんじゃ」

「安心したまえ。すべては寄付だ。学費の安さは偶然だ」

さっきと言っていることが180度違う。

「まあ、大体はグループでやるからそこまで危険ではないよ」

「ってことは、少しは危険なわけか」

「特異人種が市民権を獲得するのは何かと大変なのだよ」

「この書類の山とか？」

一真は持ったままの警棒で紙の山の一つを叩いた。

「これは会長だけだがね。さて」

唐突に朔夜は立ち上がった。

「せっかくだし、校舎を案内してやろう」

彼がコンピューターを操作すると、ランプの画面は校舎の見取り図らしきものに切り替わった。

「ちなみに地図はどこにも書いていないから覚えるように。機密であるし」

「何で機密？」

「恨みを持ったやつが潜入してきたら困るだろう？」

「へえ。危険なだけじゃなくて恨みも買うんだ」

「まあ、多少は」

何事か操作して電源を切ると、朔夜は実験室を横切ってドアを開けた。

「おや、困った」

あまり困っていない声だ。

「自分で見てみるといい」

言われる前から動いている。

ドアから覗く。

そこは、割と普通の教室だった。7×6で机が42。

もちろん、問題はそんなことではない。

「俺が来たとき、ここ廊下だったよな？」

「きっとそうだろうね。さて、困ったな。もうそんな時間か」

(もうそんな時間?)

「どういう意味だ？」

「いや、大したことではないよ。ただ、休み中には、ある程度経つとこうなってしまうことが多いからね。きっと、生徒がいないから学校もつまらないんだろう」

いろいろと聞き流せない部分は多いが。

「どうなってしまうって？」

「どこがどう繋がっているかわからないということだ」

朔夜は、ドアを開けて閉めた。

「ほら見ろ」

心なしか得意げに示した先には今度は廊下。しかし、一真が来た廊下とは違う。

「同じところからでも行き先が違うのでは、ワープゾーンよりたちが悪いな」

「ふーん。じゃあ、適当に行こうぜ」

一真は特に気負わず言った。

「へえ。不可解な空間にわざわざ足を踏み入れたいと」

「だっておもしろそうだし。さっき案内してくれるって言ったのはお前だろ。こんなところにおいてもどうせ書類仕事くらいしかやることないんだろ？」

「違うない」

朔夜が首肯したことによって、にわか魔技探検ツアーが決定された。

3 一般生徒の実態

何回か開け閉めした後、朔夜は似たような部屋に一真を連れて行った。違うのは、こちらの方が広いということと、人がいるということである。

「ここは第一実験室だ」

まあ、実験室だろうというのは予想がついていた。

「授業で実験をやるのは大体こちらだ」

「じゃあ、あっちは？」

「大規模な実験で人数を分ける時や、コンピューターを使う時だ。大きさは標準でも速いぞ、あれは」

「新技術だから？」

「もちろん」

しかし、第三、第一とくれば、

「第二は？」

「化学教師の私物」

いいのかそれで。

「あの一、流翔会長。何か用が？」

年長者らしき男子が硬い声で話しかけてきた。

「いや、別に。ただ転校生に校舎の案内をしようとしただけだよ。それとも、何か疚しいことでもあるのかい？ ほう、……申請していないのに非合法な薬物を取り扱っているとか？」

「い、いや、そ、そんなはずはない。うん」

年は上でも、明らかに朔夜に押されている。

「おーい」

少し離れたところで手を振っている茶髪の男子がいたので、楽しそうに上級生をいじめている朔夜は放っておくことにする。

彼の方は朔夜と違って上着など着ていなかったなので、少しほっとする。

近寄ると、向こうから声をかけてきた。

「転校生って、高1？」

「うん。星河一真。さんずいの河で、数字の一とまことのかずま」

一真がうなずくと、彼は破顔して右手を出し、一真が出す前に右手を勝手に握ってぶんぶん振った。

「よろしくー。オレ、エイシマハジメ。鋭い山の鳥の、数字の一。イチ仲間としてよ、ろ、し、く」

「こ、ち、ら、こ、そ」

言葉に合わせて負けずに腕を振り返してやると、隣の女子に注意された。

「あ、あ、あぶ、危ない、ですすよ？」

やけに震えた声である。対して一は、「ごめんごめん」と陽気に謝った。

「悪い、実験の邪魔して」

一真も謝ると、女の子は首が取れそうな勢いでかぶりを振った。

「いい、いいえ。鋭君があ遊んで、るのは、いいつものこと、ですす」

震えてはいるが、言うことは言うらしい。それより、体は震えているのに持っている試験管が微動だにしないことの方が一真は気になった。どういう動きだ。

「きびしいな一。あ、こいつ、タツキレイコ。龍の木に鈴の子」

「よろしく」

「よ、よ、よろしく」

自己紹介も終わったところで一真はいろいろ聞いてみることにした。

「どう？ この学校」

「まあ、楽しいんじゃない？」

「た、大変ですす」

評価が分かれた。

「それって、実技とやらのこと？」

「まあ、それもそうだが全般的に。実技は大変っちゃ大変だけど暴れられるからなー。ストレス発散になるぞ」

「で、でも、大変ですす、よ？」

ちょっと震えが取れてきた。

「ま、楽しいならいいや」

「それよりさー、お前、りゅーしょーかいちょーさまと一緒に来たる。あいつどうよ？」

逆に問い返された。

「どうって……会ったばっかだしなあ。でも」

率直に言えば。

「偉そう？」

「おお！ すばらしいな同意見だイチ仲間！ 握手しよう」

またも握手と見せかけた腕振り回しの憂き目に合ったが、それは適当に済ませて一真は聞き返した。

「よく知らないけど、あいつどういう評判なんだ？ 会長なら有名なんだろう？」

一と鈴子は顔を見合わせた。

「ま、そりゃ会長の有名税もあるけど、根本的にあいつ有名だぜ。ドクシン能力持ちだから」

「独身？ 結婚しない能力？ そもそも中学生じゃ結婚できないだろ」

「お前なー、わざとボケてんの？ 言っとくけど、唇を読む方でもないぞ。心を読むんだよ。ちえっ。読心てかっこいいから使ってみたのに、通じなかったか」

「心を読む？」

「そ。今うちの班長が被害を受けてるのがそれだ。しかも読んだのを隠そうとしないんだよ。感じ悪いだろ？」

少し考えてみる。

「何読まれてるか分からないよりいいんじゃないか？」

「そうか？ 面と向かって言われるとやじゃん。お前言われなかった？」

思い返してみるが。

「別にそんなことは言ってなかったと思うぞ」

「ほお。珍しい」

隣で鈴子もこくこく頷いている。

「ふーん」

「ま、そんなわけだから、うちの学年の魔技会会長と会計しかいないんだよ。副会長すらいな
」

「大変だな」

「そだな。でも自分がやるのは、やじゃん。あんな近づきたくない」

そうかもしれないが、身も蓋もない。

「で、お前は？ 何が得意？」

一は話題を変えると、詰め寄ってきた。

「何って……そうだなあ。スペイン語とロシア語が話せるけど。あとラテン語読める」

一真が言うと、一は沈黙した。

「うーん、いやー、そりゃさー、すごいけどさ、そういうんじゃないで」

何となく言いたいことは察した。

「言っとくけど、超能力みたいなものはないぞ。気合でドカッ、くらいはできるが」

「なんだそりゃ。今流行りの`気、ってやつ？」

「いや、別に流行ってはいないだろ。あえて言うならそうかもしれないけど」

「ま、あれだ。魔技生のたしなみってやつだな。うんうん」

「……そうなのか？」

「そ、そんなことないです」

納得しかける一真に、鈴子が否定する。

「鏡から出てくる爺さんもいるくらいだし、てっきりそうなのかと」

「お、かがみじい？」

「知ってるか？」

「もちろん。あいつ有名人だよ～。てか、クラスメイトだし。知ってっか？ 名字も各務なん
だぞ？ まあ説教くさいとこ除きゃいい奴じゃん？」

「……クラスメイトなのか？」

少なくとも見た目は同い年には見えないが。

「そうそう」

「か、鏡のそばならいられるんです。だから、実技のときも、他の人が手鏡を持っていけば参
加できます」

「ふーん」

例の爺さんを思い出してみる。

「説教くさいって言うけど、あの百連撃はその説教に常についてくるのか？ それとも俺が新参
者だから？」

「あー。最近は見ないねー。誰も相手にしないから」

「相手にしない？ 何で？」

「何でもなにも、当たらないもんはわざわざ相手にせんでも」

「当たらない？」

「だって、実体ないじゃん」

(……もしかして)

気をこめた棒で受けたから百連撃だったわけで。

「じゃあ、そのままだったらすり抜けてたの!？」

「当たり前じゃん。あれ、もしかして受けてやったの？ うわー、律儀」

「律儀というか……」

単に気づかなかっただけだ。

(冬も言ってくれりゃいいのに)

「一通り話したかね？」

そして、うわさをすれば影。

「えーと、あれ？ 生徒については聞いたけど、学校についてはあんまり聞いてないような」

「まあ、それは後で私が説明しよう」

「それはともかく、あんまりうちの先輩いじめてくれるなよ」

一が文句を言った。確かに、先ほどまで朔夜が話していた班長は、なにやら疲れた様子で座り込んでいる。

「申請した用途以外で予算を使うなら、ばれないようにやれ、というだけの話だ。私相手では無理だ？ 別に、隠そうとすればいくらでも手はあるだろう」

「どんな手があるって？」

「それは秘密だ」

「あのなあ……」

「他の所も行くんだろ？ 行くなら行こうぜ。じゃあまた今度」

陰悪になりそうな雰囲気を感じ、一真は朔夜の背を押して出口に向かった。

「またなー、一仲間」

「……ですす」

見送られつつ、2人は第一実験室を後にした。

4 転入生の親切心

実験室を出た後、再び何度かドアを開け閉めする作業に戻る。ガラッ。ガラッ。
「一応生徒には会ったし、教師――は面倒だからまあいい」
いいのか。
「あと、最低限必要なのは保健室だろうか」
「保健室かあ。あんまりお世話になったことないけどな」
相槌を打ちながら、さっきの会話を思い起こす。本当に聞こえているのだろうか。
(おーい)
「実技では怪我をすることがよくあるからね」
(聞こえてるかー?)
ガラッ。
ふと、朔夜が手を止めた。
聞こえたのかと思ったが、部屋の中を確認すると中に入っていった。保健室ではない、普通の教室だ。
「うちのクラスだ」
「割と普通だな」
「普通の部分も探せばあるものだ」
「そりゃそうか」
一真も足を踏み入れる。壁の掲示板に貼ってあるプリントを眺める。

～～異界出身の方などへ～～

皆様の声にお答えして、魔力補充器が無料になりました。

いつでも保健室へどうぞ！

保健委員会

―――体育祭の火力部門入賞者―――

なんと、2年連続優勝のアモン氏(IIQ、竜人)に、佐々浦かれんちゃん(2h、日本人)が自家製の
火炎放射器で挑み、逆転勝利！！！！

優勝	佐々浦かれん	中学2年h組
準優勝	アモン・リールード	高校II年Q組

・
・
・

(おもしろそうだなー。それにしても、あいつ何も言わないな。本当に聞こえてんのか?)

訝しんで朔夜のほうを見ると、目が合った。彼は、いつのまにか席の1つに座っている。腕を組

んでいる姿が偉そうだ。

「ちなみに、さっきからやっていることは大体想像がつくが、聞こえないな」

「へ？」

よくわからない。

「何だ、気づいてたのか。とにかく、聞こえてるんなら答えろよ。付き合い悪いぞ」

「だから、聞こえないと言っている」

(……あれ?) 「それは、文句は受け付けないって意味か? それとも」

「純粹に聞こえないという意味だ」

「？」

「鋭嶋辺りに聞いたんだろう？」

ええと。

「ドクシンの話？」

「そう。聞いた上で視線を送られれば心中で何か言っているんだろうなということくらいは推論できる。君はあまりひねくれた思考をしないようだし」

「余計なお世話だ」

違う。

「俺の話じゃないだろ！」

「簡単に言うと、相性というものがある。悪ければほとんど聞こえない」

「俺とは相性が悪いって？」

「能力はね。人格の問題ではない」

(お、フォローした)

人嫌いでもなさそうだが。

「とりあえずさあ、お前評判よくないぞ。どうにかしろよ」

「どうにかなるものでもないだろう。流翔会の人数が少なくて少々大変だが仕方あるまい」

「生徒会の仕事ならみんなで分け合えよ」

「どうにかなっているなら問題はないさ」

「で、何人だって？」

「2人だよ。会計はいる」

「ふーん」

きつとこいつは人に弱音を吐かない。できることは多少無理を通してやってしまうのだ。態度は偉そうだからあまり気づかれないのだろうが。

(このまじめさはA型かな)

一真は勝手に推測した。

座っている朔夜に近づくと、見下ろしてやる。

「? 何だね」

ちょっと考えてから、一真は朔夜の頭をわしゃわしゃと乱暴にかき混ぜた。

「えらいえらい」

朔夜はしばらく黙っていたが、一真が頭を撫でるのをやめると、呟いた。

「前言を撤回しよう」

「どの前言？」

「君の思考が理解できない」

「ほほお、それは光栄な。でも、そこまで複雑に考えたわけでもないぞ」

むしろ考えたというより、何となくだ。

「ちょっと褒めてやりたいなって思っただけだよ」

しかし、朔夜の訝しげな表情は晴れない。

「褒められるようなことをした覚えはないが」

「そんな頑張り屋のお前に俺はごほうびをやろう」

朔夜言葉を無視して一真は続ける。

「俺に何をしてほしい？」

予想外のことを聞いた、という顔で朔夜は黙り込んだ。

「おーい、聞こえてるか？」

「聴覚に障害はないが……特に君に期待することなどないよ」

「お前なー、さんざん、人手が少ないとか、仕事が大変だとか、相性が悪くてちょうどよさげだとか言っというてそれかよ。素直じゃないなあ」

「そんなことは一言も言っていないが」

「とにかく、俺は気分がいいので生徒会の仕事の一つや二つ、手伝ってやってもいいって言うてるんだよ。わかるか？ つまり、お前だってまだ子供なんだから、少しは周りに甘えてもいいだろうってことだ」

朔夜は珍しいものでも見るように一真を上から下まで見やった。

「何だよ」

「この変人ぞろいの学園でも指折りの物好きだと思って」

「そんなんだから友達できないんだぞ。お礼とかうれしいとか言ってみろよ」

「まあ、人手が増えるのは喜ばしいことだ」

「……もういいよ」

と。ふと思い出して、訊く。

「そういえば、一仲間に言った裏技って何？」

「いちなかま？ ああ、鋭嶋のことか。読心に対抗する方法だろう？ 大したことはない。しかし、思いつくのは簡単でも実行するのは難しいが」

「もったいぶってないで言えよ」

「聞こえるのは思考であって感情ではない。要は、思考が読まれても私に理解できなければいいわけだ」

考えてみる。何か、禅問答のようだ。

「教えろよ。どうせ俺のは聞こえないんだろ」

「私にわからない言語で思考すればいいというだけの話だ」

なるほど。

一真はポンと手を叩いた。

「だが、今更母語でない言語で思考しようとするのは大変だろう」

しかし、日本人でない人なら問題ないのではなかろうか。それなのに2人しかいないということとは。

「やっぱりお前にも問題あるぞ。態度を改めろ」

「問題ないと言うに」

「ところでその会計さんもしかして外国人？」

「異星人だ」

「……へー」

さすがだ魔技学園。これからは楽しみというものである。

そして、編入したてのその日に、意地っ張りの友人が1人できるなら上出来だ。

一真は満足して一人頷いた。

「ま、これからもよろしく、冬」

改めて言うと、朔夜は照れたように視線を逸らしたが、思いついたかのようにこちらを見て言った。

「魔技学園へようこそ。流翔魔技会長として、あるいは一生徒として歓迎しよう」

それにしても、この若さでこんな仰々しいセリフが似合うのはいかがなものだろう。

そんなことを思った。